

「慶応事件記」に記録された慶応4年の高潮災害

—^{いもあらい}一口村まで遡上した高潮記録—

木谷 幹 一*

I. はじめに

一般に、高潮は津波に比べて発生頻度の高い気象現象であるにも関わらず、管見の限りでは、昭和9(1934)年の室戸台風、昭和25(1950)年のジェーン台風、昭和36(1961)年の第2室戸台風などの昭和の高潮災害を除いて、大阪ではほとんど再評価されてこなかった¹⁾。一方、大阪の津波災害については、長尾が地方文書や絵図、石碑、地名などから分析を行い、中世以降の津波災害の復元を精力的に進めている²⁾。高潮災害については、木田によって大阪における有史以降の高潮災害史がまとめられており、8世紀以降昭和36年の第2室戸台風まで、20回以上もあったという³⁾。このように高潮は身近な現象であるが、次第に研究されなくなったのは、高潮災害の原因が地盤沈下であるかのようにクローズアップされたからかもしれない。例えば谷端は、昭和9年の高潮災害についてGISを用いて再評価を試みている⁴⁾が、西大阪地区の地盤沈下の影響を強調しながら、明治7年以降の淀川修築工事・淀川改良工事など一連の治水工事の影響、下水道の逆流現象、

大阪湾沿岸以外の高潮災害には触れていない。

筆者はこれまで、寝屋川市葛原の陣屋代官文書を用いて享和2(1802)年における淀川水害の復元的研究を行い、京都市伏見区淀まで遡上した高潮を確認したことがある⁵⁾。しかし、大阪では高潮被害のほとんどが大阪湾沿岸だけの被害であるかのように論じられ、それ以外の地域の被害については触れられていない。その上、京都盆地付近まで遡上する高潮が明治36年以降には確認できなくなる⁶⁾など、検証すべき課題も残っている。筆者は個々の水害について逐一史料などを分析し、自然地理学の立場から再評価することに研究意義を見出している。そこで本論では、宇治川流域の一口村付近まで遡上した高潮や、淀川流域の水害の実態が記録された「慶応事件記」⁷⁾を紹介し、その再評価を試みたい。

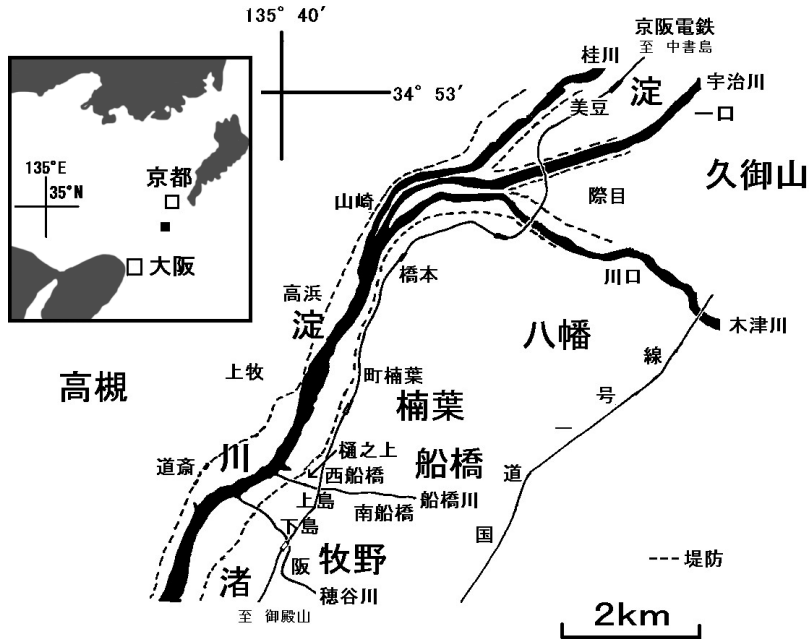
II. 「慶応事件記」とは

「慶応事件記」⁷⁾は枚方市史編纂委員の竹安によって全文が翻刻されている⁸⁾。竹安の解題によれば、この記録は旗本水野但馬守忠昌の上方知行所(以下水野氏陣屋と呼ぶ)のう

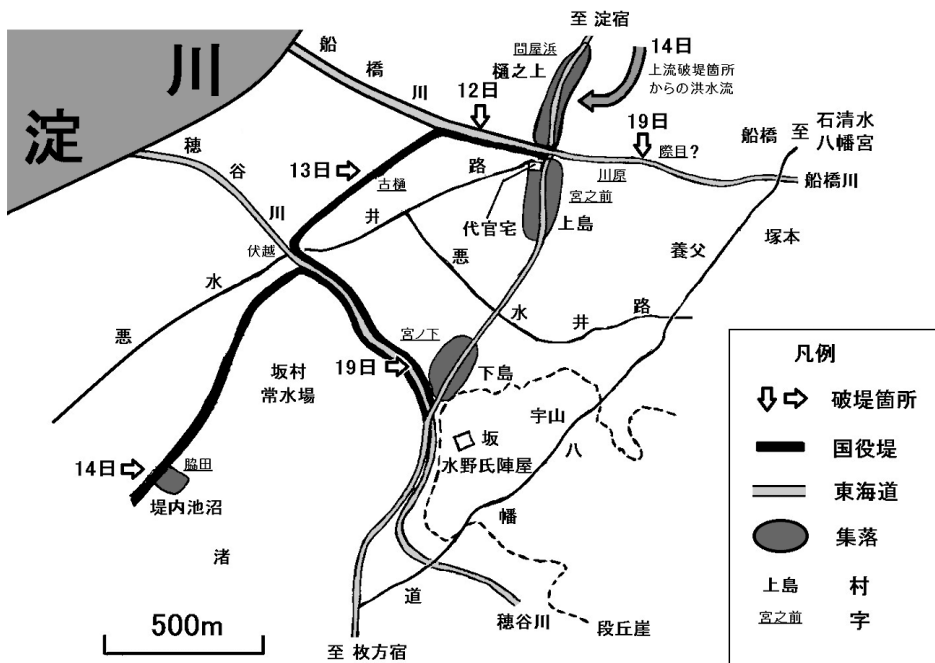
* 大阪市立豊里南小学校

キーワード：慶応事件記、慶応4年、淀川、高潮、久御山町一口

Key words: “Keio-jikenki”, 4th year of Keio Period (1868), Yodo-gawa River, High Tide and Flood Disaster, Imoarai in Kumiya-cho



第1図 地域概観図



第2図 水野氏陣屋周辺被害進展図

ち、枚方市牧野阪2丁目にあった坂陣屋代官を拝命した上島村庄屋の吉川惣七郎による公用記録で、慶応4年1月から7月までの日記である。内容は2部構成となっており、そのうち第1部は鳥羽伏見の戦いの日々の記録が中心で、枚方市教育委員会発行の小中学校向け副読本「郷土枚方の歴史」⁹⁾にも引用されている。また第2部は、水野家継嗣問題と、坂陣屋代官としての日々の記録である。そのうち、高潮記録は第2部の方に書かれている。管見の限りでは、慶応4年の淀川流域での水害前後の記録としては最も詳細な記録である。本論では水害記録の部分を中心に、枚方市牧野付近おける水害と、京都盆地の一口村まで遡上した高潮について考えてみることにしたい。史料の理解を助けるために、地域概観図(第1図)と水野氏陣屋周辺の被害進展図(第2図)を示す。

III. 史料紹介

水害記録は5月8日以降に見られる。地名には下線を入れ、括弧付部分は筆者による文中の注で、水害記録と関係のないものは省略した。

八日申大風雨

一、(前略)、大雨ニ而道筋水付ニ相成、山崎通り橋本渡り帰呂之処、淀川大水其上大風ニ而渡舟無之、高浜へ参り候処右同様、道才江七ツ頃着、是又同前、(後略)

九日晴

一、淀川表満水ニ而渡シ兼、八ツ頃見合、小船式はゐニ而万平方越ス、壱丈二尺之水

十日戌天氣蒸付候

一、坂上役人来り、過日方之雨ニ而御田地八分通水下ニ相成、見分願出候、(後略)

一、京都へ今朝米差登候処、淀辺往来舟六ヶ敷旨承る

十一日亥雨、追々強降

十二日子

一、夜中方昼へ続大雨ニ而船橋川満水、七兵衛水入、同人屋敷西手ニ而少々堤切込申候、淀川筋追々水増、(後略)

十三日丑同様大雨

一、一昨夜方今朝へ無絶間太鼓之音斗、淀川両側堤水防追々内水相増、愚宅石垣之上へ水来る、九ツ前方飯米下蔵二階江村人雇片付、残妙見堂へ相頼候。八幡北堤切、広瀬高浜堤も切候由承る、村中家財片付、苗代水入ニ相成苗取片付、最早南町ハ住居へ水入、往来之人通無之候、淀川筋追々水増、鉦太鼓之音ニ而苦々敷事、夜四つ半頃国役堤字古堤(樋)ニ而堤切、一時ニ水入ニ相成、畳立具片付候内床之上へ壱尺余付、(中略)、半時余ニ満水、家内共一同妙見堂へ立退夜明し候、(後略)

十四日寅大雨

一、水重晝夜八ツ時床方貳尺七寸半、夕方迄ニ壱尺余引落候処、又々水増候、樋之上ニ而与兵衛次兵衛茶屋本家新宅畳屋隠居潰れ、其外損所出来、既ニ九兵衛土蔵惣兵衛源兵衛も危事ニ御座候、右者植葉村切所方水入、樋之上方淀川へ往来横流ニ付、如此大荒ニ相成候、舟橋村も六歩水入、塚本も四五軒水入申候、(中略)、家内子供不残御陣屋へ立退申候、存外之洪水、(後略)

十五日卯雨 昼後晴る

一、坂村土橋流失、穂(谷)川筋所々荒

候旨、渚村領ニ而堤切、御田地水下ニ相成候、依之見分願出候、大久保様ハ今日見分候之由、(後略)

十六日辰小雨 五ツ過ル晴

(前略)、床方四寸斗水間切候、(後略)

十七日巳小雨ふる

一、(前略)

一、八幡お久来(御救米)、山城荒承る、所々堤切流家山崩潰家人損等有之旨、川口際目之間ニ而木津川切込、(後略)

一、高月領唐崎村冠村堤切込六千石水入、御城御殿も床方壹尺余上る、摂州一円白海与申事ニ御座候、扱水入引落候処、蠅ニ者誠困リ入申候

一、坂往還土橋繕目論見帳式冊持参預リ置、(後略)

十八日午終日雨

一、昨日上嶋堤切所見分事出来、(後略)

十九日未昨日から雨降続 夜中ハ強雨

一、与助来道中水附ニ而難渋之趣、三度目、淀小橋先ニ而一宿、昨日淀方舟ニ而御陣屋着種々承る、乍併京方当所迄ニ往来ニ而ハ、一番樋之上ハ荒巖數旨申聞

一、船橋川筋出水、堤所々危ク終ニ舟橋領字際目之忝ニ而切込申候、右呼切ニ而上嶋領字川原縁リ、小子所持之田地忝立木不残切倒、漸相防候事ニ付、堤切同様之損所ニ相成候

一、穂谷川筋下嶋領宮之下而堤切候、坂領所々損所出来候、内水追々相増夕方敷木迄水来る

廿日申珍敷快晴

一、(前略)、今朝壹寸五分斗引申候、土蔵式ヶ所門長屋へ者床方上へ水入不申、裏座敷本宅床方式寸斗上る

廿四日子天気

一、京へ米五斗遣ス、浅田向山兩人上京、左海(堺)安立町荒、其外所々堤切人損等承る、大和川突留南堤大砲式度発切候由、且当所之荒存外之事、兩人驚入申候一、大坂大橋(京橋?)方使来、堂嶋辺水入、町中舟ニ而往来、未曾有高水与申来(後略)

廿八日寅天気

一、(前略)、今日方四ヶ村国役堤水留へ相掛る、追々水引落宮之前辺田植直しニ掛る、竹木ニも水当立枯多ク相見へる、一体ニ塩気有之呑水塩辛ク覚候、上牧村一口村ニ而ハ真鯛取候旨承る

(七月)十八日

一、曉八ツ頃御目覚、六ツ半頃御立ニ相成候、雨降り出し申候、蛸薬師通東洞院四条通大宮へ、東寺前方小枝鳥羽通淀山城屋へ御着、存外之大風雨ニ而樋(樋)之上登リ不申、槍之丞淀へ断旁弁当持参、迎も往来六ヶ敷、雨弥強相成、川筋水増如何共致方無之、山城屋へ申談候処、幸三十石船一艘有之候間、船頭へ御談判可被成旨申聞、則船頭与引合、金式兩式分ニ而樋之上問屋浜迄着之御約定、七ツ頃坂村御陣屋へ御着相成申候、是又御着飲ニ付取斗候事

一、右大雨付所々堤切、上嶋仮橋流れ、仮国役堤切、四ヶ村住居へ水付申候、五月十三日之節与壹尺五寸斗ひくし、宅ニ而ハ床方壹尺式寸斗入候よし。

IV. 史料の解釈

5月8日は大風雨、大雨で道中浸水していた。淀川の水位が高くなっていて、「山崎の渡し」つまり八幡市橋本への渡船はなかった¹⁰⁾。

そこでさらに下流の「楠葉の渡し」はどうか
かと思ひ、島本町高浜へ移動したが渡船はな
かった。さらに下流の「磯島の渡し」はどうか
かと思ひ、高槻市道齋江へ移動したがまたも
渡船がなかった¹⁰⁾。

5月9日は晴れ、淀川は満水なので対岸へ
の移動を躊躇していたが、午後2時を過ぎて
から宿泊先の万平のところから小船2艘で対
岸へ渡った。淀川は1丈2尺の水位だった。

5月10日は湿度が高かった。水野氏陣屋
の役人が上島町の自宅にきたので、先日から
の雨による水田の水害見分願いを出した。京
都市淀でも渡舟が使用不能なほど川の水位
が上昇しているとの報があった。

5月11日も雨で、次第に雨足が強くなった。

5月12日は大雨となった。自宅北側の天
井川、船橋川が満水、自宅より下流の船橋川
堤が少し切れた。淀川はさらに水位が上昇し
続けた。

5月13日も大雨であった。昨夜から川番
の川太鼓の音が絶えなかった。内水もあって
自宅の石垣まで浸水し、二階や妙見堂などへ
米を避難させた。八幡市八幡狐川から京都市
淀美豆町の現桂川堤である八幡北堤、島本町
高浜の堤が切れたとの報あり。苗代の苗も片
付けた。淀川の水位がさらに上昇し続け、淀
川の牧野北町（字古樋）の国役堤が切れ、上
島町も1時間程度で床上1尺あまり急激に増
水したので、舟で船橋川沿いにある妙見堂に
避難した。

5月14日も大雨。妙見堂は床から2尺7寸
半の高さまで浸水し、夕方までに1尺下がっ
たが、また上がった。楠葉樋之上町では東海
道沿いの住居が壊れたとの報せがあった。淀
川の洪水流が枚方市町楠葉1丁目あたりの国
役堤切れ所から樟葉樋之上町を通過して淀川

へ戻り、枚方市船橋町、船橋川の対岸の南船
橋町（字塚本）あたりも浸水とのことであつ
た。妻子は段丘面上にある水野氏陣屋へ避難
した。

5月15日、雨昼後晴れ。牧野阪町の東海
道の橋が流出、穂谷川沿いでも所々水害と
なった。5月14日の渚内野3丁目（字脇田）
の堤切れによって、小田原藩大久保氏領の水
田に水が入ったので、水田の水害見分を大久
保様に願ひ出て、本日見分された。

5月16日は、小雨後午前8時ごろから晴れ。
自宅は床から4寸まで下がった。

5月17日、小雨。八幡市川口と京都市伏見
区淀際目町の間で木津川堤が切れ、また高槻
市唐崎と高槻市冠で淀川堤が切れた。6,000
石分の田に水が入った。高槻城の床上1尺ま
で浸水との報。水が引きだしたが、蠅に困っ
ている。牧野阪町の東海道にかかる土橋の修
繕計画書が届いた。

5月18日、終日雨。上島町の切れ所の見分
を終えた。

5月19日は雨で、夜半から豪雨となった。
京都から水野氏陣屋に戻ってきた与助によ
ると、楠葉樋之上町の被害が最も大きかった
という。船橋川の西船橋2丁目（字際目）に
あった松の木のところまで堤切れがあったと
の報。対岸の上島東町（字川原）も水田の松
や立木がすべて切り倒されていて、堤切れに
遭ったかのような被害だった。穂谷川の牧野
下島町（字宮ノ下）でも堤切れがあった。牧
野阪町でも何か所か被害があった。

5月20日は珍しく快晴となる。自宅は1
寸5分ほど水が引いた。土蔵長屋などの床上
浸水はなくなったが、裏座敷や本宅ではまだ
床上2寸ほど水が残っていた。

5月24日晴れ。（水野家陣屋のうち、丹南

郡草尾新田（堺市東区）や錦部郡甘山村（富田林市）の村役人である）浅田向山兩名が京都への道中に坂陣屋に立ち寄った。兩名から堺市から住之江区安立にかけて水害で荒廃していたこと、柏原市役所対岸にある大和川築留南堤防を大砲2発で堤防を人為的に破壊したことを聞いた。浅田向山兩名が牧野の被害は想定外であったと驚いていた。大阪京橋からの使いが来て言うには、大阪市堂島界限が浸水、町中を船で往来していたという。

5月28日、晴れ。国役堤の修復普請が始まる。水かさが減ってきた。上島東町（字宮之前）の水田では田植えをやり直し始めた。周辺は竹木が枯れて塩気が漂い、井戸水にも塩水が混じっている。高槻市上牧や久御山町一口で、真鯛が獲れたとの報せがあった。

7月18日深夜3時ごろに目覚め、午前7時ごろ出発、京都市蛸薬師東洞院から四条大宮、東寺前、小枝、鳥羽通を通過して淀に着く。迎いの船が大風雨で楠葉樋之上町から京都市淀まで上ることができなかった。雨がますます強くなってきたので、船頭に直談判して淀から楠葉樋之上町の間屋浜まで三十石船1艘を出させることにした。陣屋には午後4時ごろ到着した。大雨で上島町の東海道の悪水井路にかかる仮橋が流れ、仮普請中の国役堤も切れ、牧野北町、上島町、牧野下島町、宇山町、養父元町、養父西町が浸水した。浸水高は5月13日に比べて1尺5寸ほど低かった。自宅は床上1尺2寸の浸水だった。

V. 高潮災害の特徴

高潮被害を伝えているのは、5月19日条の「小子所持之田地衮立木不残切倒、漸相防候事ニ付、堤切同様の損所ニ相成候」と、5月

28日条の「宮之前辺田植直しニ掛る、竹木ニも水当立枯多ク相見へる、一体ニ塩氣有之呑水塩辛ク覚候」の部分である。堤切れ被害に遭ったかのような場所であった上島字川原に隣接する字宮之前には塩気が漂っていたことから、その付近は高潮被害を受けた可能性が考えられる。さらに、5月28日条の「上牧村一口村ニ而ハ真鯛取候旨承る」から、京都盆地南部の久御山町一口と淀川右岸の高槻市上牧にも高潮が遡上したために、鯛が獲れたということであった。5月8日条では、「山崎通り橋本渡り帰邑之処、淀川大水其上大風ニ而渡舟無之」とあるので、このとき台風の通過に伴い高潮が発生したのであろう。

次に高潮災害時前後の気象条件を考える。「慶応事件記」の天候記録は旧暦4月21日から確認できる。そのうち雨天は4月22、28、29日まで3日間、閏4月は9、20、22、23、26、28、29日の8日間、5月は1、4、5、6、8、11、12、13、14、15、16、17、18、21、22、29日の16日間、6月は7、10、11、14、15、16日の6日間（記録は16日まで）、7月は天候の記録が7月18日のみであった。これらの天候の記録から、閏4月20日から5月22日までの32日中24日雨が降っていたことがわかる。よって慶応4年の高潮災害は、長雨と台風が大きく影響していたものと考えられる。

一方、昭和9年の室戸台風、昭和25年のジェーン台風、昭和36年の第二室戸台風ではどうであろうか。これら昭和の高潮災害は、大阪湾沿岸部と寝屋川流域の一部に被害域が限定されている。その上台風通過時を含めた2週間の降水量はわずか60mm前後で、降水日数も3～4日程度と極端に少ない¹¹⁾。比較できる科学的情報が少ないので断言はさけるが、台風通過直前までの積算雨量と淀川の高

水位維持が、京都盆地まで高潮が遡上した原因となっていた可能性が考えられよう。

VI. まとめと今後の課題

以上、「慶応事件記」の史料紹介から京都盆地南部まで高潮災害が及んでいたこと、昭和の3つの高潮災害との気象条件の違いについても考察を行った。今後、本史料で出てきた枚方市牧野、島本町高浜、久御山町一口などで文化財の発掘などがあれば、暴浪堆積構造とされるハンモック状の斜交葉理¹²⁾を持つ地層を調査する予定である。調査によって特定された地層から海成微化石などを確認し、特定された地層のできた年代などを近世近代遺物から、京都盆地での高潮被害を考証していきたい。

〔謝辞〕数年前大阪市内各所の石碑についてご教示賜った長尾武先生には、高潮災害の再評価について激励の言葉を頂いた。枚方市史資料室では「今中家文書 弘化二巳二月楠葉外島田畠絵図」の閲覧を許可頂いた。また「明治18年水害研究会」のメンバーであります佛教大学歴史学部植村善博教授、市立枚方宿鍵屋資料館学芸員片山正彦氏との定例会を経て、慶応4年の高潮災害について研究成果として報告することができました。記して皆様に感謝致します。

注

1) 例えば①長尾 武「室戸台風、大阪での暴風・高潮の被害—小学校の倒壊、ハンセン病外島保養院の流失」、京都歴史災害研究 11、2010、17-29 頁。②高倉史人「大阪の台風災害と高潮対策」、大阪アーカイブス（大阪府公文書館発

行）34、2004、1-5 頁。③高倉史人「戦前における大阪の自然災害と府の対策」、大阪アーカイブス（大阪府公文書館発行）27、2000、1-4 頁。④谷端 郷「1934年室戸台風にみる大阪市における高潮災害の地域的差異」、歴史地理学 56-5（No. 272）、2014、1-16 頁。

2) 例えば①長尾 武「正平（康安）地震（1361年）による大阪での津波高、遡上ルート、湾岸集落への影響」、京都歴史災害研究 15、2014、11-20 頁。②長尾 武「1854年安政南海地震津波、大坂への伝播時間と津波遡上高」、歴史地震 23、2008、63-79 頁。

3) 木田伍一郎「西大阪の高潮災害とその対策」、大阪春秋 82、1996、42-49 頁。

4) 前掲 1) ④。

5) 木谷幹一「享和2（1802）年の淀川点野切れについて」、京都歴史災害研究 16、2015、1-9 頁。

6) 例えば①大阪府編『大阪府誌 第四編』、1903、1152-1155 頁。②淀川左岸水害豫防組合編『淀川左岸水害豫防組合誌 中編』、1929、141-386 頁。③浅井良亮・大邑潤三・植村善博「京都市淀、水垂・大下津における治水・水害史と淀川改良工事」、京都歴史災害研究 14、2013、29-39 頁。

7) 寺嶋宗一郎編『枚方市史』、枚方市、1951、226-227 頁。

8) 竹安繁治編「慶応事件記」、枚方市史編纂委員会編『枚方市史資料 第2集』、枚方市、1968、68 頁。

9) 例えば枚方市史編纂委員会編『郷土枚方の歴史』、枚方市、1997、178-179 頁。

10) 解釈についても、以下の文献や絵図を参考にし、一部付け加えた部分がある。

①井上正雄編『大阪府全志 巻之四』、1922、1308-1352 頁、1371-1403 頁。

②大阪府編『洪水志』、1887、111-114 頁。

③日野照正「近世淀川の舟運」、枚方市史研究紀要 9、1975、71 頁。

④枚方市史資料室架蔵「今中家文書その1 4000 弘化二巳二月 楠葉外島田畠絵図」。

11) 大阪管区気象台編『大阪の気象百年』、財団法人日本気象協会、1982、312 頁。

12) 例えば公文富士夫・立石雅昭編『地学双書 新版 碎屑物の研究法』、地学団体研究会、1998、14-16 頁。